

第11回「日本語大賞」

テーマ「美しい日本語」

高校生の部 優秀賞 受賞作品

「美しい日本の文化」

東京都

東京都立広尾高等学校

2年 村上 芽衣

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

俳句とは、日本語を美しく表現するための日本の文化だと私は考えます。小学校から高校まで授業で俳句を習いましたが、その中でも私が美しいと思った俳句をいくつかとりあげたいと思います。

まず、季節を感じる句に、石田波郷の「バスを待ち大路の春をうたがはず」があります。寒い中、バス停でバスを待っていると道行く人の装いが明るくなっていることに気がつきます。寒い日は続きながら、風は暖かくなつてきており、季節が春になったと確信するという句です。五七五という短い七音には、細かい説明は加えていないのに春という季語のみで色彩豊かな美しい風景が次々に浮かびます。「うたがはず」という表現だけではネガティブに感じるこの言葉さえ、この句では春到来の驚きを若々しく伝えていきます。

二つ目は、中村草田男の「万緑の中や吾子の齒生え初むる」です。都会にもわずかばかりにある草木の緑が濃くなり、上へ上へのびてゆく姿を見るとこの句を思い出します。感情を表す言葉はなくても、生命力に溢れた木々に囲まれた大きな空間にいる小さな命に惜しめない愛情をもつて育てていることが伝わります。季語の辞典である歳時記で万緑を調べると、中村草田男が用いたことから季語として一般化したとありました。「万緑」というこの季語がこの句を生命賛歌の句として昇華させたことに気がつき、再び句をよめば、たくさんの人の感動の記憶がはじけるように迫っていきます。俳句は余白に漂う余韻、気配、匂いまでも想像力を働かせて感じ取り、創作者と鑑賞者が共同で楽しむのだと学びましたが、創作者の感動を追体験するには、鑑賞者にも自然を尊ぶ心が必要とされるのだと考えました。年齢を重ね様々な経験をした後にこの句をよめば、また違った新しい景色が見えるのではないかと楽しみにさせてくれる力強い一句です。

四季のある国に生きる日本人は、昔から季節のうつろいに喜び、驚き、もの悲しさを重ね合わせ、自らの気持ちや体験を句にして表現してきました。読み継がれた四季折々の風物、行事は季語となり、共通の美の認識を伝えます。季語は、文化のエッセンスがギュッと詰まったものであり、故に俳句では短い十七音で読み手に風景、心情のみならず、香りや温度、触感まで感じさせてくれるものであると思います。日本語は、日本でしか使われない独自の言語ですが、それ故に、日本語でしか表現できない言葉の美があります。コミュニケーションの道具として使われるだけでなく、自然と共に生きてきた古人の生活の営みを感じさせるものでもあります。現在、国際化が進む日本ですが、俳句は海外でも親しまれていると聞きます。日本語の美しさから自然の尊さを感じとってもらえることに驚きと喜びを感じます。気候が激しく変化して、生活様式が変わっていく現在でも、季語の豊かな表現は日本文化として色あせることなく受け継がれてほしいと思います。私は、美しい日本語には、時を超え、自然と一体化し、すべての命を慈しみ尊ぶ気持ちを伝えていくことができる美しさがあると思います。